

---

# どうしよう、息子が帰省してくれない。

午睡

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

どうしよう、息子が帰省してくれない。

### 【著者名】

Z2592V

### 【作者名】 午睡

### 【あらすじ】

手塙かけて手間暇込めて育てた溺愛してゐる息子（苦労人）を涙流してハンカチ噛み千切つて見送つて早数年。

どうして一度も顔見せこないの？！反抗期なの？！

顔見せこへる手軽さないですよっ！

手軽に帰つてこれるように車だつて派遣したもん！つてか死ぬ氣に

なれば転移魔法かなんかで一瞬じゃん！

車つていうかガーゴイルなんですかけどね？それより仕事ですよ陛下。

そんなんじで息子溺愛してる魔王陛下による息子それとなく帰省させよう大作戦。

主な被害者は息子と巻き込まれた家臣及び下界の方々。

そんな家族愛溢れるハートフルストーリー

（後半嘘）

盆と正円は基本だそりやす。（前書き）

魔王が魔王らしくない。

文章が稚拙。息子不憫。作者素人。そしてなによりストーリー性があまりに乏しい。

それでも、読んでやるよつていう勇者な方は是非ご覧ください。

盆と正円は基本だそうです。

「何故じゃ - - - - -」

ぽつりと小さく呴かれた言葉は、回りこいた者達は一齊に玉座へと視線を向けた。

青い炎が白く照らし出す広間。

広間の雰囲気は重々しく、何人たりとも近づけさせない威圧感を醸し出していた。

その中で、ただじっと玉座から発せられる言葉を石のようこまつ彼達。

彼等は、ただじっと待つ。

彼の者が発したその言葉以外を受け付けずじつと。

「何故なんじゃ - - - - -」

酷く弱々しく紡がれる言葉。

その言葉についてものよつた威厳はなくただ憔悴しきった声。

「陛下 - - - -」

あまりの変わり様に、耐えきれなくなりとうとう沈黙を破つて、  
人の男が椅子から立ち上がり口を開いた。

「のう、アガレス」

唐突に、玉座の主は男の名を呼んだ。

「何で御座いましょう、陛下」

立つたまま、己の主が言葉を紡ぐのを待つ。

「下界には”帰省”なるものがあるのじゃね？？」

「は？」

思わず、素つ頓狂な声が口から漏れてしまつたことに心中で舌打ちをした。

しかし、周りにいる他の重臣達も皆、それぞれ一様に驚愕の表情である。

「た、確かに下界には”帰省”なる風習なまむけがありますが、それが何故に陸下のお氣を悩ませるのでしょうか？」

出来るだけ動搖を隠し主に質問をする彼の姿に、周囲にいた何人が心の中で拍手を送った。

「やつ、帰省なまむけ。確かに下界では親の元へ子供が帰る風習なまむけだとか」

“び”が遠くへ思おもこを馳せながら喋る主を見て、その広間に集まっていた全員の背筋に冷や汗ひんが伝つたった。

まさか……。

”親”、そして”子供”といふ二つのキーワードがつながるのも。

「へ、陛下……もじや」

それじでとつとうへ、玉座の主は声を荒げて叫んだ。

「ならば、何故つ妾の變し子は歸つて來んのぢやああああー。」

その叫びは広間を大きく揺らし、広間の外に待機していた下位悪魔達を気絶させるほどの威力を持つていた。

その咆吼で氣絶はしないもののよろめいたり立ちくらみを起す者  
数名。

「落ち着いてくださいー！陛下ーー！」

「黙れ！妻は落ちついておる。愛し子を下界に預けて早10年！幾ら何でも長すぎるぞ！」

なんとか気張つて耐えるものの、氣を抜けば怒気にあてられ卒倒しそうだった。

だれか、ヘルプ！！

「お言葉ながら……陛下、さすがにそれは無理でござりませぬ」

嗄れた声とともに、一人の男が腰を上げた。

毅然とした態度、ピンッと伸びた背筋。

鷲のように鋭いその眼には知性の光が見える。

まさに、家臣の鏡と言えるであろうその態度。

「何じや、アモン」

幾分か叫んで落ち着いたらしく、その聲音はしつかりとしていた。

「お言葉ながら、月日は光陰の矢の如」とひとともいいましょうか、

今一度我々の世界へと足を踏み入れるのは彼にとつて困難ではないでしょうか。」

彼……、それが誰だかは皆が知っていた。

「何が言いたいのじゃ。」

その先に続く言葉が分かっているからこそなのか、再び声音に不機嫌さが混じる。

「彼は……今ではもう立派な人間で御座います。」

よく言ったーー！

アガレスは心の中で彼を絶賛した。

そう、もう大体の方は察していろであつたが、ここは泣く子はさうに泣き喚くおぞましき魔界。

そして下界とは即ち人間界のこと。

他にも天界や冥府などがあるのだが、面倒だから割愛。

そして、この広間の中央、玉座に座つてゐる、この方じや。

「少しほは、「自分の御立場を認識なさつてください

魔王

陛下」

不機嫌そうに、足を組み口をとがらせる魔王に、家臣一同は皆溜息

をつけた。

盆と正円は基本だやつや。 (後書き)

読んでくださった勇者な日々ありがとうございます。

出来れば感想や指摘などしていただければありがたいです。

## 魔界へこひりしゃー（前書き）

前回と変わりず文章はT-E-S-E-T-I-Oです。

そしてあまり進展がない。

それでも見てやねひつじゅーねえかーとこう賢者な方は「覗くください」。

## 魔界へいらっしゃい

「セウジヤー。」

また重くなつた広間の雰囲<sup>アムビ</sup>気を一掃するかのよひ、魔王は言つた。

「なんなら妾<sup>わらわ</sup>が直接出向いて・・・」

「・・・・やめてください」

彼女の提案を遮るように広間にいた全員が叫ぶ。

「な、なり、どうしようとも此のじやーー！」

一度目の咆吼で今度は天井にぶら下がっていたシャンデリアが降つてきた。

激しい音を立てて円卓にぶつかるシャンデリアの音は静かになつた広間に反響した。

「しかし、陛下・・・」

再びアモンが声を発した。

「失礼ながら、人間<sup>魔界</sup>が我々の世界にやつて来るには膨大な魔力と強靭な肉体が必要で御座います。ただでさえ、ここには下界とは比較できないほど凶暴な魔物のなども生息しているのですぞ？」

そこで、一端言葉を切つて己が主を見上げる。

彼女の表情に怒りが見えない事を確認してからアモンは続ける。

「今下界と魔界は対立しております。その状況で愛し子様が此方に  
出向くとなると・・・」

しかし、アモンの発言は最後まで続かなかつた。

何事だらう、とアモンを見ていたアガレスは視線を彼女の方へと向  
けて、固まつた。

彼女は、魔王は、微笑んでいた。

しかもものすごく嫌な微笑みだ。

真紅の唇は三日月の弧を描いていた。  
ルージュ

そしてその瞳は獲物を見つけた獣のよつに爛々と輝いている。

長年彼女に仕えている彼等は悟つた。

これは、不味いことになると。

「へ、陛下・・・？」

さすがのアモンも動搖を隠せない。

魔王は微笑んだまま口を開いた。

「つまりは、我らの世界に来なければならぬといつて、そういう状況にさせればよいのじゃな？」

そういう状況 - - - - - 。

それは、つまり - - - - - つ

「ならば、話は簡単じゃ。妾わらわの愛し子を勇者ゆうしゃとして魔界まいがいに招けば良い！」

今度ばかりは沈黙せざるを得なかつた。

誰一人として言葉を発する事が出来なかつた。

ただ、監口かんくうに出でなくても思つゝとせ一つだつた。

だれか、助けて - - - - !

彼等の振り絞るよつた願いも空しく、魔王は嬉々とした様子で計画を練り始めていた。

その後、広間の外で待機していた下位悪魔達は、広間から出でてきた重臣達の顔色を見て、  
なにか良からぬ事が始まるということを悟つた。

その後、家臣総出で説得を試みるも、失敗。

そして魔王は魔界中の全てのものに厳命を下した。  
彼女

- - - - - 勇者をあぶりだし、必ずやこの魔界へと連れてこい。

そう高らかに言った魔王の隣には、一、二日で死者とも冥府の遣いとも判別つかぬほど青白くなつたアガレスの姿があつたといつ。

## 魔界へこひりしゃこ（後書き）

わつほーい。

描写表現にこだわった。

「指摘などがないままいたい、是非いい報告へだれたい。」

それでは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2592v/>

---

どうしよう、息子が帰省してくれない。

2011年10月8日03時56分発行